

# 普通附属学校の未来

## 附属小学校のこれまでとこれから

附属小学校副校長 坪田耕三

附属小学校は明治6年の創立。本年で135周年を迎える伝統ある学校だ。

面白いことに、毎年、創立記念式典をやる。本校卒業生で、社会でご活躍の方に来校いただき、子どもの前で仕事の話などをしてもらう。子どもはそれを聞いて将来はあのように活躍したいのだと胸をふくらます。

本年は国立近代美術館の松本透氏の話であった。話の中で本校出身の画家を紹介してくれた。岸田劉生、藤田嗣治、ポール・ジャックレイ等々有名な方を輩出していることを聞いてびっくりであった。

子どものころに学んだ体験や自由に考える授業の在り方などが我知らず身に付いている。社会に出てから沢山の人が出会う中で、何故か心が素直に通じ合う人がいて、親しく話をするうちに同じ学校の出身であったことに気付くということがしばしばあるという話である。

同じ学校で教育されたことが身にしみて、似たような性格を形成するのであろう。なかなか目に見えるものではない教育文化は長い伝統の中で創造されるものである。このようなものが創り上げられるのは容易な年月ではかなわないし、これを将来にも続けていくことも簡単ではない。崩れるのはたやすく、創り上げるのは難しいことなのである。

附属小学校のこれからは、今まで同様に「全人的教育」を目指し、子どもの「こころ」「からだ」「あたま」をバランスよく鍛えていく。

そして、教師は、常に全国の教育のモデルとなるべき教育内容や方法を開発する先導的教育だ。そして、全国の教師教育のために「授業研究」に焦点を当てて実践し続ける。さらに日本の教育ばかりではなく国際的視野に立ち、海外の教師のための初等教育の在り方を発信していきたい。現在のところ、米国・タイ・韓国などにおいて、我が校主催での「授業研究会」を開催している。こんな事業をますます盛んにしたいものである。ひいては、それが子どものよい教育になり、日本全国の教育の充実に繋がるものと確信している。

## 附属中学校の未来を考える

附属中学校副校長 山口正

昨今の世界の情勢や、教育をとりまく状況などを考えると、附属中学校の未来についてはさまざまな事柄が課題としてあげられます。国際化の問題、中学生に対する教育内容(学習内容や学力向上等)、そして、筑波大学の附属としての問

題(教育実習や教育研究の問題等)などです。本校では、教育内容等に関しては、全国の普通学校のモデルとなるべくさまざまな事柄を先導的に研究・発信してきました。また、筑波大学の附属としては、教育実習等の協力(教育研究については、やや不足)をしてきました。それらは、未来にわたっても今の状態を続けていって欲しいものだと考えます。

以上の二つに対して、附属中学校の従来十分でなかったことは、国際化の問題です。現在も海外の教員の授業参観や短期の交換留学生の受け入れ、さらに年間に一人程度の教員の外国派遣などを行っておりますが、その問題は十分とはいえません。附属中学校の未来を考えると、この点は、大きな問題だと思えます。しかし、それを解決するために、例えば、帰国子女などの受け入れなどの方策は十分な「国際化」ではないと思えます。また、交換留学生なども十分ではないと思えます。これからは、単に、海外から生徒を呼ぶだけでなく、日本国内にいる外国人(大使・公使など)の子女の積極的受け入れなどを検討していくことも必要であろうと考えます。もちろん、ほとんどの教科の授業がたとえば英語で実施できるような体制をとりつつ、いわば、「国際学級」と称してもよいようなクラスをつくることです。「国際化」に向かって、附属中学校は、未来を模索したいと考えます。

## 紫峰のことも 夢のまた夢?

附属高等学校副校長 高澤耕一

ここ何年か給与が上がっていないので、初夢に運氣上昇を託して、茄子紺の桐のマークが入った筑波山の絵を描いて枕の下に敷いて寝た。天高くトビも舞わせた。夜中にネズミが絵を引きずり出したらしく、以下のような夢を見た。

附属の教員のうち、10人程が大学教員を兼任して、教育研究科等での講義を担当している。このことにより、附属学校の教員の定数が見直され、増員されていた。来年度以降、教員免許状更新講座の開設等諸課題が山積みであることを考慮すると、必要な措置なのであろう。小さな組織より大きな組織ほど、業務内容が増えたとき、教員一人の負担増は小さなものとなる。大は小を兼ねるとは賢人の智慧。

附属学校と大学との兼任は、現場と理論の融合を図り、互いに補い合うことで良い刺激と結果を生む。筑波大学が、教員養成・教師教育を本学の在り方構想の中で一つの柱として捉えるのであれば、本気で実現させなければならぬ課題である。

附属の教員との交換研修で来校した海外の教員が授業を持っていた、教壇にガウスやヨーヨー・マが立ち、数学、理科、音楽の授業をしていた。英語の授業では、リンカーンとキング牧師がチーム・ティーチングでディベートの指導をしていた。授業を受ける生徒の中に魯迅、チャンドラ・ボース、アウン・サ

# The Future of Laboratory Schools, University of Tsukuba

ン・スー・チーの他に英国からの留学生もいた。聞けば、イートン校やハロー校から転校してきたと言う。イートン校と同様、大塚に建てられた寄宿舎で寮生活を行い、附属で学び、Oxbridge(オックスフォード大学とケンブリッジ大学のこと)よりもレベルの高い筑波大学への進学をめざしている。ミッシュランガイド3つ星の寮の食事は最高とのコメント。

ある日目覚めたら、年金が夢と消え去る国にしては、寝盗む(転じてネズミ)年の初夢がバクに食われなかったことに感謝したい。

## “6年間の自由空間”を世界に! ~筑波大学附属駒場中・高等学校~

附属駒場高等学校副校長 小林 汎

昨年5月1日に、本校は60周年を迎えた。1947年に東京農業教育専門学校の附属として発足以来、校名は色々変化してきたが、自由闊達な気風の下で、懐深く、子どもたちを大きく育てる伝統は続いている。12年ほど前に、学校目標を「自由・闊達の校風のもと、“挑戦し、創造し、貢献する”生き方をめざす」と制定した。この言葉が、本校の雰囲気良く表している。また、昨年出版した『日本の教育を拓く』(晶文社)の中で、本校の特徴を「6年間の自由空間」と表現した。今から50年近く前の1959年に、中高一貫体制を確立し、中学生全員がそのまま高校に入学できるシステムをつくり、6年間のびのびと育ててきた。さらに、「ケルネル田圃」と呼ばれる由緒ある水田での実習を続け、食を学ぶ、実学の伝統も大切にしている。校章は、麦の穂をかたどったものであり、「一粒の麦死なずば…」の麦であり、また、生命の糧としてのものを象徴していると言う。ここに、本校の精神が表されている。こうした校風の下で、これまでに、約9千人の卒業生が巣立っている。彼らの社会的活躍は目覚ましいものがある。

次の60年を見据えた時に、どのように“挑戦し、創造し、



貢献する”のかが求められている。一言でいえば「駒場の教育をグローバル・スタンダード化する」、これが、日本や世界の諸課題に応えるものにもなる、そんな夢を持っている。

60周年を機会に、同窓会「若葉会」は、筑駒人材バンク事業を立ち上げた。また、大学から社会貢献プロジェクトでお金が付いたのを利用して、目黒区立駒場小学校や世田谷区との連携事業、「筑駒アカデミア」を始めた。学校として足元を固め、地域に貢献する活動の第一歩である。以前からの夢は、本校にサイエンス・アドベンチャー館を建設することである。在校生と地域の子ども、そして学生・研究者のたまり場として、自然科学教育に関する多目的な施設をめざし、理数嫌いの子どもをなくす拠点である。

さらに夢が広がる。本校は筑波大学のサテライト、「駒場キャンパス」としての価値を持っていると思う。ここに、「筑波大学“知の創造”教育研究センター」を建設し、初等教育から生涯教育に至るまでの総合的な教育拠点をつくり、世界に発信し、教育の力により世界平和の実現に貢献していく。この夢の実現は、筑波大学の指導者の先見性如何にかかっている。期待したい。

## 普通附属学校の未来に期待して

附属坂戸高等学校副校長 大平典男

日本の外国の若者との意識調査で、日本の若者がかなり低い状況で将来に展望を持っていないことが報じられたが、PISAの基礎学力試験だけが注目されている。売上げ低下を販売員(教師)の教育で取り戻そうとしているかのようであるが、良い商品の開発や環境を整えることにも、もっと目を向けて欲しいものである。教育を取り巻く厳しい環境の中で、附属学校はそれぞれが特色ある教育に取り組むことは当然であるが、全体としてもこれまで以上に小中高大が連携して、教育の100年を俯瞰しつつ我が国の教育に新しい道を示す先導性を持たなければならない。それが多様な校種を擁する筑波大学の附属学校であればこそできる役割の一つと言える。特別支援学校との連携が可能な環境にあることも普通附属学校にとって大きな強みとしなければならない。附属学校はそれらを進める上で保護者や児童・生徒が、研究学校としての役割を理解しており、実験的な試みに挑戦することができる土壌が備わっている。また、教員や児童・生徒のレベルも、教育実践を行う上での許容力や修正力を備えている。急速に社会や人間が変容をしている今日、教育を総合的な視野で統合し、小中、中高、高大の接続の在り方や、教育内容に関していかにあるべきかの研究に先導的に挑戦することが附属学校の役割であり、それが大きな社会貢献に繋がることにもなると思える。附属学校にはそれを為し得る十分な力が蓄積されている。